

# 日本におけるサーフィンをする女性の 50 年 (1)

## — 1990 年代以降のサーフィン文化とジェンダー公平 —

50 years of Surfing Women in Japan (1)  
— Surfing Culture and Gender Equity since the 1990's —

水野 英莉\*

Eri Mizuno

1990 年代以降のサーフィン文化を、ジェンダー公平の視点により分析した。1990 年代にはボディボードを「迂回」した若い女性の参加が増加し、2000 年代以降にはショートボードに乗る女性が増加するという、日本社会に特徴的な女性参加のプロセスがあることがわかった。参加人口の性比に大きな変動はないが、女性による競技会運営という取組みや、わずかながら組織の意思決定に関与するなど、変化の兆しも見られた。

キーワード：サーフィン、ジェンダー、女性、ジェンダー公平 (gender equity)、女性史

### I. はじめに

日本にはじめてサーフィンが伝えられたのは、1960 年代と言われている。概して近代スポーツは (サーフィンが近代スポーツなのかという議論はとりあえず置いて)、男性の参加者が多いが、サーフィンも例外ではなく、現在でも男性が 8 割強を占めている<sup>1)</sup>。どのような状況においても、サーフィンをする女性は存在してきたが、サーフィンの表舞台には、女性が登場することがきわめて少なく、その記録も断片的である。

本稿は、日本にサーフィンが導入されてからの 50 年余りの歴史のうち、特に 1990 年代以降のサーフィン文化に焦点を当て、女性たちとサーフィンの関わりについて分析しようとするものである。分析の視角として、ジェンダー公平 (gender equity) を採用するが、ここではそれは女性がサーフィンを行なう際の機会の平等のみならず、結果の平等がどれくらい確保されているのかを、評価することを意味している。対象となるのは、プロ組織における活動の記録や、雑誌・映像・ウェブサイトなどのメディアにおける表象、聞き取りや参与観察で得られたデータなどである。

II 章では、先行研究を概観し、本研究の視座について説明する。III 章では、1990 年代以降のサーフィン文化とジェンダーについて、1990 年代と 2000 年代以降の二つの時代に区分し、分析する。

この二つの時代は、それぞれ日本のサーフィンと女性の関わりにおいて重要な特徴を備えている。最後にIV章ではこの結果を踏まえ、分析と考察を行なう。ジェンダー公平が確保されるために何が必要なのかを検討し、今後の進むべき方向を示す。

## II. 先行研究と本研究の視座

### 1. サーフィンをする女性

サーフィンの起源については諸説あるが、木の板や船を使って波に乗るということをサーフィンだとするならば、長い歴史があることは確かである。漁の手段として、宗教的な儀礼として、あるいは遊びとして、ミクロネシアの国々や、日本でも、沿岸地域に古い記録があるとされている<sup>2)</sup>。現在私たちがサーフィンと呼ぶ行為は、1960年代に世界へ爆発的に広がった、世俗化した近代的なサーフィンである。日本にも同時期に、高度経済成長を背景とした、アメリカ文化への憧れや、海辺のレジャー・リゾート人気の中で、湘南や外房などを中心に広がっていった。1964年には第1回日本サーフィン選手権が開催され、日本サーフィン連盟が発足している。60年代中頃には、日本に第一次サーフィンブームが到来した。1970年代末から1980年代の初めは、サーフィン経済が成長を遂げた時期である。プロのサーフィン組織がつくられ、男女とも国内サーキットで戦う枠組みができた。都会に住む若者が、カタログ雑誌と言われるファッション誌を手に、服装やライフスタイルにこだわり始めたのもこの頃で、サーフィンはファッションとして、ライフスタイルとして浸透していった。

サーフィン人口についても諸説あるが、総務省平成23年社会生活基本調査によると248,000人、男性201,000人(81%)、女性47,000人(19%)であった。レジャー白書ではサーフィンとウィンド・サーフィンを合わせて2013年に50万人としている。レジャー白書では、1990年からの推移と、性別の参加率がわかる(図1)<sup>3)</sup>。

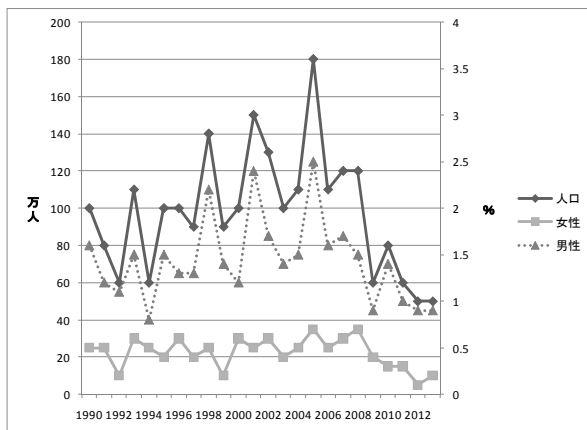


図1. サーフィン、ウィンド・サーフィンの参加人口

サーフィンも他のスポーツや身体活動と同じく、女性が参加するには大きな壁が立ちはだかってきた。スポーツをすることは「男性らしさ」と密接に関係づけられているため、女性があるべきとされる規範からの逸脱とみなされるからである。サーフィンをする女性を論じるということは、「男性らしさ」と密接に結びついた男性中心の領域において、居場所を開拓し、サーフィンができる喜びや自信を得てきた女性について論じることを意味する。

困難な状況においても、女性はサーフィンをし続けてきたが、これまでサーフィンの文化は男性中心に語られてきた。2000年代に入り、ようやく、女性学、女性史、ジェンダー研究、フェミニズム、男性性研究等の文脈で、サーフィンの歴史や文化を、女性を中心にすえてとらえなおそうとする動きが出てきた(Carol, 2007; Booth, 2001; Bush, 2014; Henderson, 2001; Heywood, 2008; Reed, 2010; Stedman, 1997)<sup>4)</sup>。これらの業績には、アメリカ(カリフォルニアとハワイ)やオーストラリアというサーフィン文化を牽引してきた地域において、活躍し、奮闘したサーフィンをする女性が記録されている。サーフィンの歴史の全体像を描くためには、このようにジェンダーの視点で歴史を再構成することが必要である。歴史を読みかえるということの意義は、歴史の全体像を豊かにするだけにとどまらず、現在サーフィンをする女性、将来サーフィンをする少女をエンパワーする重要な営みでもある。

ジェンダーの視点で歴史を捉えなおす方法は、女性史という分野においてさまざまに試みられている<sup>5)</sup>。近代日本のジェンダーに詳しい大越愛子は、近代国家には公的領域に男性、私的領域に女性を位置づけるという固定観念があり、女性がいた領域は言説も限られ資料が残されていないとし、「語られないもの」として周辺化されていると言う<sup>6)</sup>。こうした認識によって、これまでの記録が「正史=男性史」であったことを気づかせ、その内容を批判的に問いなおす姿勢が可能にされたのである。

では日本でサーフィンをする女性の記録はどうか。少なくとも、学術的な領域においては、管見の限りでは存在しない。サーファーに向けた雑誌等のメディアでは、過去に輝かしい戦績を残した女性がインタビューなどに応じる記事は残されているが、時代的な変化や現在とのつながりは把握しにくい。日本で人々がサーフィンを始めてちょうど50年が経とうとしている。どのような部分で、どれだけ平等が達成されたのか、されていないのか、問題点を今一度ふりかえり、今後の展望を示すことが重要である。本稿ではまず1990年代以降にしぼって分析を始めることにする。

## 2. ジェンダー公平という視座

社会におけるさまざまな現象を、ジェンダーとの関連から解読するジェンダー研究(学論)が誕生したのは、1980年代である。これに先だち、1960年代から1970年代にかけては、世界中の国々でマイノリティによる異議申し立て運動がおこったが、この運動のなかには女性の解放を目

指したフェミニズム運動も含まれている。この運動からジェンダー研究は誕生し、性差が社会的に規定されていることを明らかにしていった。

ジェンダーは、もともと性別をあらわす文法用語であるが、フェミニズムではジェンダーを、社会的・文化的な性のありようを指す語として用いている。つまりジェンダーには、「自然」で、「宿命」で、変更不可能であると考えられてきた性差を、社会的、文化的、歴史的に作られるものだとする仮説が含まれているのである。ジェンダーは非常に多義的な概念であるので、本稿で用いるジェンダーの意味を示しておくべきだろう。ここではジェンダーという概念を、性差や性規範についての観念や知識として、また男女間の関係を権力関係という視点から把握するために用いる分析の視点として扱っていく。すなわち、性差を所与のものとして、社会には人間に性差を見出す知識や諸実践があると考え、それによって人は男女に異なるふるまい方を求められ、権力がその差異に支配関係を付与していく、と考えるものである。言うまでもなくその不均衡な権力関係の是正を求める立場である。

ジェンダーの観点からみて望ましい状態は、ジェンダー平等、ないしはジェンダー公平（公正）と呼ばれる。1994年にイギリスで開催された第1回世界スポーツ会議では、原則の冒頭に、社会とスポーツにおける公平と平等と題され、次のように宣言されている。

レジャーやレクリエーション、健康の促進あるいは高度なパフォーマンスが目的であろうと、人種、肌の色、言語、宗教、信条、性的指向、年齢、婚姻の有無、障がい、政治的信条や所属、国籍や社会的出自にかかわらず、スポーツに参加し、関わる平等の機会を、すべての女性の権利である。

資源、力、責任は、性のバイアスにもとづく差別なく、公平に、分配されるべきである。しかし、その分配は、女性と男性が得られる利益において、いかなる不公正な均衡も是正するべきである<sup>7)</sup>。

このように宣言され、スポーツに責任をもつ組織や団体が、国連憲章、世界人権宣言、国連の女子差別撤廃条約の定める平等条項に従うよう、国と政府によってあらゆる努力がなされるべきであるとされている。ジェンダーの平等（equality）や公平（equity）については、紙幅の都合上、その厳密な区分についての議論に立ち入ることはできないが、ひとまず前者を機会の平等、後者を結果の平等と端的に定義しておきたい<sup>8)</sup>。機会の平等とは、すべてのひとに同じスタートラインを用意することに照準があり、結果の平等とは、すべての人に同じフィニッシュラインがもたらされるよう働きかけることに照準がある。

スポーツをする権利を享受するのは、長らく男性であった。現在日本ではスポーツ基本法が施行され、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であると定められ

た。性別によってスポーツ参加が禁じられることは、もはやない。しかし、機会が開放されていても、結果の平等に至るまでには、さまざまな壁を取り払わなければならない。サーフィンについても、女性はあからさまに排除・差別されることは少なくなってきたとしても、さまざまな場面で平等・公平は確保されていない。よって本稿では、結果の平等を求めるジェンダー公平を分析の視角とし、サーフィンと女性の関わりについて分析していく。

### 3. 分析の対象と方法

分析の対象は、1990年代以降のサーフィン文化である。本稿でサーフィンという用語を使う際には、1960年代以降の近代的なサーフィン、すなわち、より軽量のサーフボードやボディボード（ウレタン素材など）を使って波に乗るスポーツやレジャーを指す。文献、雑誌、映像資料、ウェブサイト等のメディアから得られたデータを中心に分析する。これらのデータを読み解くための知識や経験として、背景にはこれまで行なってきたインタビュー調査や参与観察がある<sup>9)</sup>。

これらの資料から、ジェンダー公平の視点でサーフィンと女性の関わりについて分析していくわけだが、その際、まず1990年代以降のサーフィン文化とは、どのようなものであったのかについて把握することが重要になる。それは、サーフィンと女性の関わりを、この広い文脈に位置づけることで、特徴を浮かび上がらせることができるからである。次章ではまず女性サーファーをとりまく社会として、1990年代と2000年代以降のふたつに時代を区分する。両時代にはサーフィンをする女性の歴史の中で大きな転換点が含まれており、それぞれの特色を示すことができるからである。

## Ⅲ. 1990年代以降のサーフィン文化とジェンダー公平

### 1. 1990年代

#### a. テクノロジーによる限界の超越

1990年代のサーフィン界における大きなできごととしてしばしば言及されるのは、トウイン・サーフィンと、ASP (Association of Surfing Professionals、以下ASP)<sup>10)</sup>による「ドリームツアー」の開始の2つである。トウイン・サーフィンとは、パドルで(手で漕いで)乗ることができないほど巨大な波を、ジェットスキーによって水上スキーのように途中までひっぱってもらい、推進力をつけて波に乗り出すサーフィンのことである。当然、非常に危険をとまなう行為であり、秀でたサーフィンの能力に加え、トウインをするための特別な訓練とそれによって獲得した技能、それをサポートしてくれる人的な資源に恵まれなければ、近寄ることのできない世界である。限界を超える挑戦という、新しい局面が切り開かれた時代である。そしてASPのドリームツアーは、ツアー開催地を、1990年代半ば以降は、これまでの「人口の多い首都圏から遠ざかり、高品質の波のある場所」へと移すことを主催者に奨励するようになったことを指す。これにより、「世界最

高峰のサーファー、世界最高峰の波」という、今日の ASP の企業理念が生まれた。開催が気象条件に左右されやすい競技であるので、その季節に最も良い条件の場所で大会を開催することができれば、選手はより良いパフォーマンスをすることができるのである。

1990年代は、インターネット等、情報技術がめざましい進歩をとげた時期でもある<sup>11)</sup>。1990年代半ばからドリームツアーが可能となったのは、こうした技術の普及とも深い関係がある。サーフィンは、野球やバスケットボールなどのいわゆるメジャーなスポーツとは異なり、テレビ中継されることはほとんどない。結果を知りたいければ、はるか遠くの海岸に赴いて観戦するか、雑誌が発売されるまで一カ月近く待たなければならなかった。しかし、インターネットを通じてその様子が中継されれば、世界のどこからでも迫力のあるパフォーマンスを見ることができ、刺激的なイベントの一員となることができるのである。1996年には、サーフィンのイベントが初めてウェブキャストされることになった<sup>12)</sup>。

1990年はまた、1972年生まれのケリー・スレーターと Quiksilver 社が、100%のスポンサー契約を結んだ年でもある。彼は後に11度の世界チャンピオンに輝き、この記録はまだ当分誰にも破られることはない。次項で紹介するリサ・アンダーソンと並び、誰も到達したことのない水準にまで、技術においても、人気においても、その市場効果においても、サーフィンを高めたひとりである。

90年代のサーフィン文化の特徴は、これらのハイレベルな世界のできごとに加え、文化が世界各国に浸透し、ファッションとしてのみならず、実際にサーフィンをする人が増えていったことも記しておくべきだろう。筆者が国内で調査を行っていた時、サーフィンの道具を販売する店（サーフ・ショップ、以下ショップ）のオーナーが、「昔に比べて、ほんとにサーフィンする奴が多くなった」と語った。「ほんとにサーフィンする奴」とは、「かつこうだけでなく、実際にサーフィンをする奴」という意味である。当時サーフィンをしていた複数の人々から、1980年代のブームの頃などは、サーフィンをしていることが「かつこいい」、「もてる」と考えられていたので、車のキャリアにサーフボードをボルトで固定する（＝つまり実際はサーフィンができない）「陸（おか）サーファー」がいっぱいいた、というエピソードを語った。「世界最高峰」の高みを目指していたサーフィンの中心地アメリカと、ようやくファッションの域を出ようとしていた日本を比べると、文化の成熟度に大きな格差を感じる。日本はこの頃ようやく、ファッションとしてのサーフィンに、スポーツやライフスタイルなどのプラスアルファの要素が根づき始めた。

#### b. Roxy とリサ・アンダーソン

サーフィン史をふりかえると、新しい時代の幕開けを感じさせるのがこの1990年代であるが、サーフィンをする女性という視点で見れば、最も重要なできごととして、Quiksilver社の女性向けライン、Roxy が立ち上げられたことを外すことはできない。Quiksilver社は、1969年にサーフィ

ン用ショーツの販売を開始し、現在ではアクション・スポーツ<sup>13)</sup>の市場における服飾メーカーとして知られている。若者のライフスタイルや文化を牽引し、業界全体に大きな影響力を及ぼしてきた。Quiksilver および Roxy は、プロサーファーに出資するだけでなく、数多くの大会やイベントの広告主でもあり、世界中の若いサーファーを発掘する仕掛けを作ってきた。1990年に満を持して発表された Roxy は、創業の翌年には100万ドルの売り上げを記録した<sup>14)</sup>。1994年には、ASPで4度チャンピオンに輝いた、リサ・アンダーソンをチームライダーに迎え、その後も多くの女性をサポートしている。

1990年代のサーフィンをする女性のなかで、最も有名なのはリサ・アンダーソンだろう。彼女が波に乗る姿は、「男性のように」攻撃的で、それでいて「女性らしく」優雅でもあると評され、容貌も「美しく」、これまでのサーフィンをする女性像（「女らしくない、かわいくない、男性のように鋭いサーフィンができない等」）を完全に打ち破る存在であった。どの時代にも技能に秀でた女性はいたが、アンダーソンの登場は成長著しい Roxy の強力なサポートなどを背景に、特にアメリカでは女性のサーフィンを一気にメジャーなものに推し進める力があつた。

1994年にサーフィンを始めたプロサーファーのホリー・ベックは、幼いころ、サーフィンをしたいと母親に言うと、それは「男の子のするもの」として反対された。しかし、「かわいくてたくましい」アンダーソンの写真を目にして、「見て、彼女はかわいいよ！」と言って母親を説得したという<sup>15)</sup>。アンダーソンは1994年に最初の世界タイトルを手にしたのち、1996年には女性で初めて米『Surfer』誌の表紙を飾った。見出しには「リサ・アンダーソンは、君よりサーフィンがうまい (Lisa Anderson surfs better than you)」と記され、多くの読者を湧かせた<sup>16)</sup>。それは、読者の大半を占める男性サーファーにとっては実に挑発的なメッセージであり、性差別や排除に耐えてきた女性サーファーにとっては小気味のいいメッセージであり、これからサーフィンを始める多くの少女たちにとっては力強い励ましのメッセージでもあつたに違いない。

### c. プロ第2世代の活躍

では、日本の状況はどうだろうか。1990年代に日本でサーフィンをしていた女性のうち、アンダーソンと同じくショートボードと呼ばれる6フィート前後の短い板に乗って活躍していたプロたちがいる。短い板なので、不安定で難度が高いが、乗りこなすことができれば鋭いアクションをすることができることから、「男性的」なイメージを付与された道具である。彼女たちをさしあたり、70年代から80年代にかけて活躍した第1次世代に続く、第2世代としておこう。1990年から1999年までの日本プロサーフィン連盟 (Japan Professional Surfing Association、以下 JPISA) のグランドチャンピオンは、北村勢津子 (1966年生まれ)、小野里美之 (1960年生まれ)、上滝恭子 (1968年生まれ)、造道生 (1962年生まれ)、北川成美 (1965年生まれ) といった選手たちである<sup>17)</sup>。このうち、北村と造道と北川は、サーフィンをするために大阪から波の豊富な四国に通

い、その後は住居も四国に移して技術を磨いた。1990年代の国内向け『Surfing Life』誌には、彼女らが大きな波を乗りこなす写真がしばしば登場する<sup>18)</sup>。この時代のプロは、都市部出身で、兄や男の友人や先輩、恋人などの影響でサーフィンを始め、アマチュアの大会に出るなどしていくうちに頭角をあらわし、プロに転向というルートをたどることが多かった。先行する1980年代の第1世代の背を見て、たくましく道を切り開いてきた女性たちと言える。

その一方では、若手として頭角を現しつつあった1978年生まれの谷口絵里菜に、大きな期待が込められた記事も見られる<sup>19)</sup>。谷口は、北村らが大阪から通い詰めた生見海岸に生まれ育ち、家の目の前にある海でサーフィンを始めた。サーフィンは都市部の若者が沿岸部の資源を「再発見」して行なわれてきたが、ついに沿岸部の地元住民、しかも女性はその資源を活用する時代がきたのである。ちなみに男性の場合、すでにサーフィンをする父親を持つジュニア世代が雑誌に登場し、親子二代でサーフィンをする様子が取り上げられている<sup>20)</sup>。

また、アマチュアで競技を行なっている女性の場合には、日本サーフィン連盟（Nippon Surfing Association 以下、NSA）の記録によると、レディースの枠に加えて、1987年から始まったガールズのカテゴリーが90年まで存在していた。それ以降は2006年の第14回ジュニアオープン選手権まで、女性のカテゴリーは1つである<sup>21)</sup>。男性の場合は、1990年時点ですでに、ボーイズ、ジュニア、ジュニアメン、メン、シニアメン、シニア、マスター、グランドマスター、支部長、ロングボード、ニーボード、ロイヤル、ボディボード男がある<sup>22)</sup>。当時のサーフィン人口の男女比は9対1とも言われていたので、カテゴリーが男性に偏る一因となっているのだろう。1994年にサーフィンを始めた筆者自身の経験としても、男女比の9対1というのは実感として正しく感じられる。しばしば女性サーファーの少なさを感じ、沖に出ていくと男性サーファーからもの珍しげでぶしつけなまなざしを受けることを居心地悪く思っていた（それは現在でも感じる時がある）。プロが華々しく活躍する一方で、一般的にはまだまだサーフィンをする女性は多くはなかったのである。

#### d. ボディボード・ブーム

日本における1990年代のサーフィンをする女性を語る上で欠かせないのが、ボディボードでサーフィンをするボディボーダーと呼ばれる女性たちの存在である。ボディボードはポリプロピレンやポリエチレンなどの素材でできた100センチ前後の長さのボードで、サーフボードに比べて小さく軽量なので取り扱いやすく、柔らかい素材なのでけがをしにくい。値段もだいたい3万円以下とサーフボードの4分の1以下程度なので購入しやすい。基本的に、足にフィンをつけて腹ばいになって波に乗るので、サーフボードに立ち上がるよりは容易に感じられやすい。こうした理由から、気軽にサーフィンを楽しむことができる道具として、ボディボードは人気を集めていった。



ジェンダーの視点から見ると、ボディボードには別の局面があることがわかる。それはつまり、ボディボードの「易しさ」「手軽さ」「安全性や安心感」が、「男らしくない」と関係づけられ、ショートボードよりも格下に見られることがあるという点である。「ビート板」、英語では「spongy（スポンジ野郎）」と見下すような表現がなされることがある。「子どもの遊び」と見なされることもあって、筆者の見る限り、南カリフォルニアやクーランガッタ（豪）においてボディボードで海に入っているのは、日本かブラジルなどの南米の女性、そして小学生以下の子どもであった。現地の若い女性は、ショートボードか、200センチ前後のロングボードに乗っていた。では男性のボディボーダーは存在しないのかというとそうではなく、ボディボードに付与された「男らしくない」イメージを払しょくする戦略だろうか、ボディボードに「腹ばい」ではなく、ドロップニーと呼ばれる「片膝立ち」のスタイルで乗るなどの工夫が見られた。女性の場合はスピンと言われる波上で回転する技を多用するが、男性の場合は空中に飛び出すエアなどの技を入れて、女性と差異化する傾向があった。

1964年から国際大会を開き、プロの登竜門となっているサーフィン世界選手権大会（International Surfing Association、以下ISA）の記録を見ると、次のような興味深い結果が得られた。1990年から2013年までのボディボードの大会結果から、表彰台にあがった4位までの選手のメダル数を合計すると、男子の場合はブラジル（10個）、フランス（9個）、オーストラリア（6個）、ポルトガル（6個）、スペイン（4個）、タヒチ（2個）と続いた。チリやアルゼンチンといった国々も入っている。女子の場合は、ブラジル（8個）、オーストラリア（5個）、フランスとポルトガル（4個）、日本・スペイン・アメリカ（2個）と続く<sup>23</sup>。ショートでは常連のアメリカはひとつもないこと、日本の女子はあっても男子はないこと、いわゆるサーフィンの「後進国」の国々が多数を占めることなどから、それぞれの地域でボディボードに付与されたジェンダー・イメージとの関わりや、サーフィン文化の成熟度との関わりなどが示唆されるのである。

ただし日本の女性にとっては、ボディボードのブームは、サーフィンを始める絶好の機会の到来だったとも言える。当時の日本でサーフィンをするには、まず海辺に行く車とガソリン代、高価な道具を買いそろえ、教えてくれる人を探さなくてはならないことを意味していた。こうしたものを手に入れることができた女性だけが、サーフィンをすることができた。ボディボードであれば、より安全に容易にサーフィンを始めることができる。しかも重要なのは、「女性らしさ」を失わずにサーフィンをすることができる点である。女性らしさにジェンダー化されたボディボードは、男性が行なえばスティグマが付与されかねないが、女性であれば本人がどう意識するかに関わらず、周囲から「女性らしい女性」と見なされる可能性が高まる。サーフィンに興味があっても「女性らしくない」と見なされることを望まない女性も、ショートボードを乗りこなす自信のない女性も、ボディボードであれば安心して海にこぎ出すことができたのである。

実際、1990年代は、日本にボディボードをする女性が急増した時期である。それをあらわすの

が、1989年に創刊した、日本で唯一のボディボード雑誌『Flipper』誌の発行巻数の推移である。1990年から1992年にかけて年に2巻、1993年には3巻、1994年には4巻、1995年と1996年には5巻と発行数を伸ばしていった。1995年の読者アンケートによると、読者の属性は以下のとおりである。性別は、女性が82%、男性が18%。年齢は、23歳以上が43%、19～22歳が37%、18歳以下が11%、30歳以上が9%。職業は会社員が51%、学生が24%、フリーターが8%、主婦が7%、その他10%。ボディボード歴は、1～2年が46%、3～5年が20%、1年未満が19%、これから始める人が11%、5年以上が4%。海に行くペースは、週に1～2回海に行く人が62%、月に1～3回が19%、ほぼ毎日が6%、その他13%となっている。都会に暮らす20歳代の働く女性が、週末の休みを利用してボディボードを楽しんでいた様子を推測することができる。

日本のボディボード・ブームを代表するのが、1977年生まれの小池葵である。1991年のNSAの大会で優勝し、1996年にプロテストに合格した。11年間のプロ生活のうち、日本のプロサーキットで10回の優勝をおさめている。小池の場合は、両親ともにサーファーで、6歳までハワイで過ごしている。小学校6年生の時に父親から遊び道具として手渡されたという。1998年には非常に危険で大きな波の来る、ハワイのパイプラインという場所で開かれた女性ボディボーダー連盟（Association of World Bodyboarders）の世界大会において、並みいる強豪を倒して2回の優勝を飾った。名実ともに頂点を極めた小池は、2007年に引退するまでのあいだ、『Flipper』誌ではその姿を見ない号はないほどの人気で、輝かしいボディボード・ブームの時代を象徴する存在であった。

2015年現在、小池は日本プロフェッショナルボディボーディング連盟（以下、JPBA）の理事を務めている<sup>24)</sup>。JPBAは、2002年に前身となるJCTC（日本スーパーツアー実行委員会）の発足から始まる。ウィメンズクラス43名、メンズクラス40名、ドロップニークラス男子16名と女子1名の計100名が公認プロ選手として登録している。ドロップニークラスとは、膝を立てた姿勢でライディングするクラスである。所属選手の女性は44%、男性56%で、大きな違いはないが、理事・役員構成を見てみると、理事に元プロ選手の女性2名とウェブスタッフに1名の女性がいるだけで、理事長、理事、コンテストディレクター、ジャッジ委員長、コンテストスタッフ、オフィシャルフォトグラファーの12名はすべて男性である。割合にして、女性が25%、男性が75%を占める。

## 2. 2000年代から現在

### a. 激しい浮き沈み

次に、2000年代以降のサーフィンをふりかえることにしよう。この時代の大きな特徴として、ひとつには、1990年代終わりごろから2007年頃まで、Quiksilver社の売上げが右肩上がりに上昇していったこと、つまりサーフィンの市場が急速に拡大していったことがあげられる。ただし、

2009年には売り上げが53%減少するなど、非常に激しい浮き沈みも経験している<sup>25)</sup>。他の業界同様、2007年に起きたアメリカのサブプライムローン問題、2008年のリーマンショックによる景気の悪化が、世界各地の市場に深く影響を及ぼしていると考えられる。

日本でも、2009年には『Surfing World』誌が廃刊となった。1975年に日本で初めて出版されたサーフィン専門誌だったが、インターネットの普及によってサーファーたちの情報取得のスタイルが大きく変わったことや、景気悪化の影響などによって、継続が困難になったと推測される。

2014年には、Quiksilver社は、24年にわたってスポンサー契約を結んでいたケリー・スレーターとの契約を終えたと発表している<sup>26)</sup>。2010年には、無敵のスレーターの「ただ一人のライバル」と目されていた、アンディ・アイアンが、ホテルの一室で死亡しているのが発見された<sup>27)</sup>。死因については明らかにされていないが、薬物過剰摂取が原因ではないかとする報道もある<sup>28)</sup>。1990年代から続いた華やかなサーフィンの一時代が終わりを告げ、新しい時代が始まろうとしていた。

日本のサーフィンについては、全体として、2000年代以降、若手を育てる環境が少しずつ出来始め、戦績を残しつつある。2014年には日本アクションスポーツアソシエーション(JASA)が発足し、本来であれば競合する国内大手メーカーや、海外メーカーの日本支社が、合同で一般社団法人を設立し、日本のアクション・スポーツ(サーフィン、スノーボーディング、スケートボーディング等)業界の活性化と発展をめざすとしている。この体制によって、ASPの日本での大会はポイントを高く設定できるグレードの高い大会を複数開催できたという<sup>29)</sup>。冬の寒い時期、冬休みを利用して、ハワイなどの波の豊富な競争の激しい地域でトレーニングを行なう日本の小学生、中学生、高校生の姿は、もう珍しくなく、海外メーカーの所有する一等地にある合宿所に参加することを許される若い世代の姿も見受けられるようになった<sup>30)</sup>。

## b. ブルークラッシュ

2000年代には激しい浮き沈みを経験したサーフィン業界であるが、サーフィンをする女性という視点で見れば、非常に充実した時代となった。トップクラスの選手の技術レベルが格段に向上し、サーフィンする女性が増え、すそ野も広がったのである。象徴的なのが、2005年にパイプラインで初めて女性だけの大会が開かれたことである。男性に対しては、既に1971年に最初の大会が開催されていたので、実に35年遅れである。新しい試みのために奔走したのが、バンザイ・ベティと呼ばれるベティ・デポルトという女性である。パイプラインはバンザイ・パイプラインとも呼ばれ、愛称にその一部が使われるデポルトは、サーフィンの「聖地」ノースショアのアイコンである。現在でも、彼女のように18フィートから20フィートもある巨大な波に乗ることのできる女性は、決して多くはない。デポルトは当初、「女性たちがパイプラインで波に乗れるか、本当にコンテストを開くことができるのか」心配していたという。96名が集まって行なわれたこのイベントは、大成功を収めた。デポルトは、インタビューにこう答えている。

「この場所を女性たちが自分自身のものにできるということに、本当に感激しています。賞金を準備できなかったのは残念ですが、初年のこのイベントは価値があります。私たちにはその能力があるということを示す以上に、これは実現可能なイベントだということを示しました。間違いなく、今日、私たちはこれが実現可能なイベントであることを証明しました」<sup>31)</sup>。

大波に乗る女性は、ハワイの古い記録にも残っており、どの時代にも並はずれて勇敢で優れた技術の持ち主がいたのだが、2000年代はそれに一層強い光が当てられ、より多くの女性がチャレンジした時代だと言えるだろう。1972年生まれでオーストラリア出身のレイン・ビーチリーは、世界チャンピオンのタイトルを7回獲得した後、トウイン・サーフィンを含む大波への挑戦で、2011年にはXXL Global Big Wave Awardを受賞している。また、タヒチの有名な大波のポイントであるチョーパーでも、女性はサーフィンをするようになり、女性だけのサーフィン・フィルム『Peaches』（2000）では、世界のトッププロたちがボートで旅をし、危険な波に挑戦する映像が記録されている。こうした良い波、危険な波でのパフォーマンスや、仲間同士の旅のフィルムは、これまで男性たちだけのものだったのである。

『Peaches』をはじめとして、2000年代は女性だけのサーフィン・フィルムが量産された時代である。以下、タイトルと発行年を示してみる。

Peaches (2000)、Poetic Silence (2001)、Blue Crush (2002)、7 Girls (2002)、Roxy Ieran to Surf, Now (2002)、The modus mix (2003)、Ocean Angels Girls of the Curl (2003)、A Girls Surf Addiction (2004)、Aqua Dolce (2005)、AKA: Girl Surfer (2005)、Heart of a Soul Surfer (2004)、Girls Rip - A New Era in Women's Surfing (2005)、Sol Sirens (2005)、One Winter Story (2007)、Dear & Yonder (2009)、Fashion (Because Girls Love to Surf xoxoxo) (2009)、Hana Surf Girls (2010)、First Love (2011)、Leave a Message (2011)、The Surf Girls The Explosion (2011)、The Women and the Waves: A Female Surfing Experience (2011)、Soul Surfer (2011)、Blue Crush 2 (2011)、By the Way (2012)。

女性サーファーに向けて作成されたビデオ、ハリウッド映画として配給されたもの、映画祭に出品されたショートムービー、スポーツ用品のメーカーが作成した十数分のムービー等がある。いずれにしても、これらはすべて、サーフィンをする女性が主役であるという共通点がある。革新的なライディング・スタイル、大波への挑戦、女性だけの旅、女性同士の友情などが描かれ、ファッション・モデルではなく現実にサーフィンをする女性の姿が登場する。水着を着て（着ていないときもある）砂浜で寝そべったりするなど、男性視聴者を想定したこれまでのフィルムにおいて、男性サーファーの「男らしさ」を引き立て、彩りとして添えられるような「サーフィンをしない女性」の姿ではない。

なかでも、映画『Blue Crush』は、21世紀におけるサーフィンをする女性映画の金字塔とも呼ぶる作品である。ジョン・ストックウェル監督、ケイト・ボスワーズ主演によって、2002年に

アメリカで公開された。興業収入は、アメリカ国内だけでも約4000万ドルを超え、国外の収益と合わせると、5200万ドル以上となる<sup>32)</sup>。映画では、3人の若い女性が登場し、主人公のアン・マリーがパイプラインの大会でタイトルを獲得するまでの成長ストーリーが描かれる。積極性に欠ける女の子が、さまざまな障害を乗り越え、トレーニングを積み、仲間に支えられて強くなっていく姿は、女性たちの心をつかんだ。この映画のあと、サーフィンをする女性、マリーのようにショートボードに乗る女性は世界中で急増したのである。マリー役のボスワーズのスタントも、ハワイの女性プロサーファーが演じており、すでにサーフィンをしている女性にとっても見ごたえがあり、話題に富む映画となった。

同じころ、ペルー出身のソフィア・ムラノビッチが世界チャンピオンのタイトルを獲得した。南米出身の選手としては、男女ともに初めてのことであり、南米はもちろん世界で大きな話題となった。これまでランキングの上位は、アメリカのカリフォルニア、ハワイ、フロリダなど、オーストラリア、南アフリカなど、波の豊富な地域や文化の発信地となっている地域の選手が独占してきたので、「サーフィン先進国」以外の地域の選手たちに、大きな希望をもたらしたのである。

#### c. 日本のブルークラッシュ効果

日本でもサーフィンをする女性の急増という変化は、雑誌の発行巻数にもあらわれている。雑誌『Beach Girl』が創刊されたのは2001年であるが、同年には2巻の発行だったのが、2002年には5巻、2003年に6巻、2004年に5巻と巻数を伸ばしていった。2005年になると勢いが弱まり始め3巻、2006年に2巻、2007年に1巻、2008年から2010年まで2巻、2011年には1巻を発行して休刊となった。この雑誌は、日本では初めて女性だけを読者ターゲットとし、サーフィンを中心にすえている点で、他の雑誌とは一線を画しているのである。1978年に創刊された雑誌『Fine』は、サーフィンをする女性を一貫して扱い、サーフィンをする女性たちにとって貴重な情報源であったが、あくまでも紙面の主体はファッションである。したがって、『Beach Girl』の創刊は、「実際にサーフィンをする女性」が、これまでになく勢いで増加したことを示す有力な手掛かりと言えるのである。1989年にボディボードからショートボードに転向していた筆者も、『Blue Crush』公開後には、海岸に若い初心者の女性が急増したことを実感した。まさに「ブルークラッシュ効果」である。

さて、日本でも女性だけのサーフィン・フィルムは2000年代に入ってはじめて作成されるようになった。娘波(2004)、Present(2007)、Nature(2008)、Keep in Smile(2011)等である。他にも、タレントのアンジェラ・マキによるハウツ―DVDであるSurf in Hawaii(2005)、Surf in Hawaii2(2009)、サーフィンをする女性が主役の映画、Rainbow Drive inn(2006)などである。アメリカに比べ、数こそ少ないものの、これまでになく新しい傾向であった。

ブルークラッシュ以降の最も大きなできごとは、女性だけのアマチュア大会が開催されるよう

になったことである。運営は、プロの選手によるもの、地元のショップや有志によるもの、メーカーによるものなどさまざまだが、主催者が女性であり（運営スタッフに男性は含まれるが）、競技に参加するのは女性だけである。

時系列に沿って見てみると、1999年に福地恭子（当時）プロが、「yesco. Surfer Girls Cup」という自らの名前を冠した大会を千葉で開催し、少なくとも5回の記録が確認できる。2000年にはアイ・ウェアメーカーのangelが平野ミナ子プロのプロデュースで「エンジェル・レディースカップ」を開催<sup>33)</sup>、2001年にはRoxyによる「Roxy Challenge」が始まっている。2002年には、愛知を拠点とする大沢裕子プロと数人のプロが集まり、「おいでんガールズカップ」が開かれ、2014年現在まで継続されている。2004年に高知では谷口絵里菜プロが「にこにこカップ」を開催し、2008年まで行なわれた。2004年には宮崎で「Mermaid Cup」が始まり、現在も川越典子プロが実行委員長を務める<sup>34)</sup>。千葉で「はれのち晴れ Girl Cup<sup>35)</sup>」、2007年に島根で「Hamada Girls Cup<sup>36)</sup>」が開催され、両者とも2014年現在まで継続中である。2009年に茨城でボディボードの沼尻和弥プロが「Mahana Girls Cup in Ibaraki」を開催、2010年に千葉で「ビーチベイビークップ」、2012年に「静波ガールズコンテスト」、2013年に藤沢で「aloha girl cup」、福井で「越前三国しおさいものがたりカップ」が開催され、2014年現在も継続中である。2011年からは、それぞれ独自に運営されていたこれらの大会が、サーキット形式で総合得点を競うシステムを展開するようになり、「他の地域の選手の技量を比較することや、選手同士の情報交換など」が可能になったという<sup>37)</sup>。こうした大会はプロの登竜門ともなっており、上位に入賞した選手たちがその後次々とプロ資格を得ていった。アマチュアといえども見ごたえのある戦いが繰り返されている。

女性だけの大会の内容は、どのようなものか。筆者も選手として参加した、2004年第2回「おいでんガールズカップ」では、「ショートボード オープン」、「ショートボード ビギナー」、「ショートボード ママさん」、「ロングボード」というカテゴリーが設けられていた。当日は、カテゴリーごとの勝ち抜き戦のヒートのほか、プロのエクスプレッション・セッション（模擬演技）、ミスコンテスト、フラダンスのショー、マッサージのブースなどもあった。参加者は、参加記念のオリジナルデザインTシャツや協賛企業からのプレゼントをもらうことができ、勝ち抜いた選手は手作りのトロフィー、パリ行の航空券などが贈られた。プロと気軽に話ができるチャンスもあった。大会は終始、たいへんにぎやかで明るい雰囲気の中で行なわれ、ヒート中は真剣な戦いが繰り返されていた。ふだんは男性のなかに混じってサーフィンをしている全国の女性が、ひとつのビーチに一堂に会す様子は圧巻である。当日は見渡す限り女性という、普段は起こり得ない状態になり、男性が足を踏み入れることがはばかれるような雰囲気となっていた。

では、女性の、女性による、女性のための大会が開かれることの意義とは何か。アマチュアの女性が大会に出場する機会は、これまでもNSA（全日本サーフィン連盟）のレディース（現在はウィメン）カテゴリーや、ショップや地域の大会においても、同様に可能であった。しかしこ

これはあくまでも男性のカテゴリーが複数あって設けられているのであり、参加者の圧倒的多数は男性であり、良い波の時間帯は男性カテゴリーにあてられることが多く、表彰式でも最後に発表される最も栄誉あるカテゴリーもやはり男性にあてられているのである。そういった意味で、女性が裏舞台でも表舞台でも活躍し、その両方にスポットライトが当たる経験というのは、多くの女性にとってエンパワーされる機会となるということができるだろう。裏舞台のスタッフは、長い時間をかけて大変な準備し、自分たちでもできるという経験をするし、表舞台の参加者たちは、自分と同じように、遠くの海でもがんばってサーフィンをしている女性がいるという事実を目にすることになる。大会に参加していると、何度も出会ううちに友人になり、良いライバルになる。技術に磨きをかけたいというモチベーションの向上にもなり、女性に与える影響は計り知れないものがある。

#### d. プロ第3世代

最後に、年代以降のプロツアーでグランドチャンピオンのタイトルを獲得したプロ選手について分析してみよう。2000年代の優勝者は、上滝恭子、小野里美之、ながいせい、間屋口香、杉浦麻里衣、萩原水紀、谷口絵里菜である。2010年代以降は、大村奈央、庵原美穂、田代凧沙となっている。このうち、上滝、小野里、ながい(造道)、小野里は、年齢層的に上述した第2世代である。次に続く新しい世代として78年生まれの谷口、83年生まれの間屋口、80年代生まれの杉浦、86年生まれの萩原、81年生まれの庵原がおり、さらに90年代生まれが登場し、92年生まれの大村、97年生まれの田代が位置づけられる。

第2世代が基本的に自力でサーフィンをする道を切り開いてきた世代だとすると、第3世代の80年代生まれのプロたちの特徴として、庵原以外は、サーフィンをしている親の影響を受けて始めているという共通点がある。杉浦の父親はサーフィンの用具を販売するショップを営み、間屋口はウィンド・サーフィンをしていた父とともに、中学・高校までハワイで過ごした。萩原も父親がサーフィンをしているのに影響を受けている。大村の場合は、鶴沼海岸のすぐそばで育ち、家族旅行のハワイがきっかけでサーフィンを始めた。田代は、父親がサーフィンをしていたのがきっかけで、小学校1年生の時にサーフィンを経験している。第2世代との違いは、親もサーフィンをするジュニア世代ということ、またサーフィンをするポイント近くに居住し、サーフィンをする環境に恵まれているという点である。第1世代が、アルバイトをしてためたお金で、週末に海に行き、また都心に戻って高校へ行ったり、アルバイトをしたりして、ついには移住をしたのとは大きく異なる。筆者がフィールドにいるとき、「一番強力なスポンサーは親」という語りを聞いたことがある。一般的には、ツアーで業績を残し、販売効果のある、人を引き付ける力のあるプロにしかスポンサーは付かない。しかし、親は子どもにそのような条件を付けては投資しない。むしろ、無条件の投資を惜しまない場合が多い。この語りは、そのことをうまく表現している。

2000年代以降は、親の豊富な文化・経済資本が、本人の達成に影響を与え、格差を広げていく時代が到来したことを示している。

とはいえ、たとえプロツアーで上位にいても、サーフィンで生計を立てることは本当に難しい。2013年度の年間賞金ランキングを掲載した記事では、国内ツアーのJPSA、国外ツアーのASPの賞金をそれぞれ合計したランキングが示されている。一部を抜粋してみる<sup>38)</sup>。

表 1. 2013年度 JPSA 年間賞金ランキング

(円)

	順位	名前	JPSA 獲得金額	ASP 獲得金額	2013年 獲得金額
ウ イ メ ン	1	庵原美德	660,000	15,000	675,000
	2	野呂玲花	345,000	290,000	635,000
	3	前田マヒナ	295,000	245,000	540,000
	4	大村奈央	240,000	135,000	375,000
	5	橋本小百合	315,000	0	315,000
	6	宮坂桃子	2220000	50,000	270,000
	7	川邊聡美	250,000	0	250,000
	7	田代凧沙	220,000	0	220,000
	9	高橋みなど	110,000	75,000	185,000
	10	谷口絵里菜	170,000	0	170,000
メ ン	1	大野修聖	3960,000	2,715,000	6,675,000
	2	加藤嵐	1210,000	1,185,000	2,395,000
	3	大原洋人	0	2,245,000	2,245,000
	4	大橋海人	50,000	2,100,000	2,150,000
	5	仲村拓久未	995,000	1,025,000	2,010,000
	6	田中英義	1580,000	260,000	1,840,000
	7	林健太	615,000	505,000	1,120,000
	8	辻裕次郎	360,000	720,000	1,080,000
	9	新井洋人	0	1,065,000	1,065,000
	10	田中樹	500,000	555,000	1,055,000

プロたちは、ここで示したツアーでの獲得賞金のほか、他団体などの開催する大会での賞金のほか、スポンサーとの契約による収入が得られる場合がある。それは、契約金、月収制や年俸制による給与、戦績に応じたボーナス、ツアー費用、物品の提供などである。プロ自身がショップなどを経営したり、アルバイトをしたりしている場合もある。このランキングを見て目に入るのは、男女間の格差であるが、記事にはそのことについて一言も触れられていない。むしろ、日本のプロツアーだけを回っていても稼ぐことができない現状に対し、「プロスポーツならば、勝って賞金を稼ぐというのが当たり前だと思う」ので、若手には海外に出て挑戦をすること、日本の業界内にはより市場を拡大して賞金で食べていけるようにすることを国内のサーフィン業界（市場やプロ組織等）に求めている。女子の賞金を見ると、これでは生活ができないだけでなく、日本



全国で開かれるツアーに参戦する費用もまかなうことができない。JPSAには2015年現在、全部で43人の役員が存在するが、女性は事務局と広報にわずか2人所属するのみである。ちなみにアマチュア組織のNSAを構成する、全国の都道府県をベースにした支部長は、全70人中、女性は1名のみである<sup>39)</sup>。

## VI. 考察

ここまでの章で、1990年以降のサーフィンと女性の関わりについて述べてきた。端的にまとめるなら、1990年代はボディボードがブームを迎え、女性により広く門戸が開かれた時代であり、2000年代はショートボードに乗る女性が増え、女性自身の手で意思決定に関与しはじめた時代である。本章では、これらの結果をジェンダー公平の視点に沿って分析していくことにする。また、ジェンダー公平が進んだところ、ジェンダー公平が進んでいないところを指摘しながらその評価を行なっていきたい。

### 1. 1990年から現在までの日本社会とジェンダー

1990年代は日本社会全体としてはどのような状況であっただろうか。主なできごととしては、バブル崩壊から失われた10年と呼ばれる平成不況に突入したことがまずあげられるだろう。1995年には阪神淡路大震災を経験し、1997年の消費税率値上げ、財政再建による政府支出の削減等で再び不況になった。低成長の時代を背景に、女性の労働力率は上昇し勤続年数も伸びている。賃金格差も縮小傾向にあった。ただし、労働力率の上昇の大きな要因は、パートや派遣が増加したためであり、女性が結婚や出産後もキャリアを継続することは容易ではない<sup>40)</sup>。厳しい時代であったが、むしろこの時期に多くの女性がサーフィンを始めたというのは興味深い。既に男女雇用機会均等法が施行され、仕事に就けばある程度の平等が保証された。可処分所得が増加し、未婚率も上昇していたので<sup>41)</sup>、サーフィンをする環境が整ったと考えることができる。先述したように、サーフィンは、道具をそろえるための資金、海に行くための車など、初期投資が比較的高額なタイプのレジャーである。時間や所得を自由に費やすことができる未婚の雇用された単身者は、意外にも景気悪化の影響を受けにくいのである<sup>42)</sup>。

国内の景気は、2001年を底として回復傾向になった。しかしながら、2007年アメリカのサブプライムローン問題、2008年のリーマンショックにより、景気は悪化の一途をたどる。さらに2011年の東日本大震災の津波被害、および原発事故による放射能汚染問題によって、海のレジャーが控えられる傾向が強まった。サーフィンのみならず、マリンスポーツの市場全体が低迷することとなった<sup>43)</sup>。1990年代から伸びはじめ、さらには2000年代の「ブルークラッシュ」効果で勢いがついたサーフィンをする女性の増加も、雑誌やDVDの発行部数などを見る限り、ここでいったん途切れているようである。しかし、サーフィンをする親のもとに生まれ育った世代が成長し、

女子だけで見ると海外ツアーで転戦するような選手の数が増加している。景気の影響を受けてスポンサーが得られず、海外ツアーに参戦する中堅以上の男子選手が減ってしまったのに対し<sup>44)</sup>、女子とジュニア世代の男子は親の支援を受けて実力をつける機会を得ている。アマチュア的女子も自ら大会をマネジメントするようになり、女性の知識や経験が積み重ねられている印象である。

## 2. ボディボードを「迂回」した女性のサーフィン参加

サーフィンをする女性に関して、アメリカやオーストラリアといったサーフィンの「先進国」と、日本とのあいだにある最も大きな違いのひとつは、1990年代に日本ではボディボードのブームがあり、これによってサーフィンをする女性が増えたこと、そしてボディボードでのサーフィンに「女性らしさ」という「ポジティブ」な意味づけがなされたことである。

Ⅲ章で述べたように、ボディボードは比較的安価で安全なので、これまでサーフィンに縁のなかった女性も気軽にサーフィンを始めることができる。一方で、こうした「易しさ」が、「男らしくない」と結び付けられることもあり、男性がボディボードをすることは避けられたり、露骨に差別化されたりすることもある。他方、この「男らしくない」点は、スポーツをすることで「男らしく」なりすぎるのが嫌な女性にとっては、好ましく受け取られることを意味しており、ボディボードは人気を獲得していくのである。

先に見たとおり、ISAのボディボードカテゴリーにおけるメダル数にもあらわれているように、世界のサーフィン文化を牽引する、いわゆるサーフィン「先進国」の国々では、ボディボードは大人のスポーツやレジャーとしてはそれほど盛んに行なわれていない。南米地域やヨーロッパ、日本などがサーフィン「後進国」であること、そしておそらくはその国のボディボードへのジェンダー・イメージ、男女のジェンダー規範など、経済的な豊かさなどもおそらくそこに関係している。

もちろん最初からショートボードを選ぶ人はいたが、少なくとも日本では、女性のより広い層に対してサーフィンの門戸が開かれた。ブームの消滅とともにサーフィンをやめた女性もいれば、ボディボードを契機としてショートボードやロングボードに転向してサーフィンを継続した人もいた。日本の場合は、ボディボードを「迂回」した女性のサーフィン参加が進んだという特徴が見出せるのである。

## 3. ジェンダー公平はどこまで進んだか

それでは、スポーツのジェンダー公平、すなわち女性と男性がスポーツをすることで得られる利益において、不公正な均衡がないか、結果の平等がもたらされているかという観点から、1990年代以降のサーフィンはどのように評価できるか考察していこう。

第一に、サーフィンへの参加について。種々の統計によると、参加人口は男性が8割前後、女性が2割前後で、1990年代以降はそれほど大きな変動はなく、依然として大きな不均衡がある。それでも、ボディボードの登場とそのブームによって、特に若い女性の参加が容易になり、門戸が広く開かれたと言える。ただし、「女性らしさ」にジェンダー化されたボディボードをする女性は、実際は両義的な存在である。サーフィンという男性優位な世界に進出する存在であると同時に、サーフィンの「男性らしさ」を際立たせる存在でもあるからだ。サーフィンをする人として同列に扱われるというより、常に差異化され、ボディボードという特定の場所にカテゴライズされてしまう可能性がつきまとうからである。それでも、ボディボードのブームというステップがあったからこそ、2000年代の新しい傾向、すなわちショートボードでサーフィンをする女性の増加が可能になったのかもしれない。一部のバイタリティある女性のものだったサーフィンが、多くの女性にとって身近になったのは大きな進歩と言える。

第二に、組織や団体における意思決定への関与について。JPSAの役員は、43名中女性は2名と極端に偏った状況にある。男女の賞金格差は、男性に偏った参加人口がしばしばその理由としてあげられるが、ほぼ同日に同じフィールドで行われる大会で、ここまでの格差があるのは果たして本当に正当であるのかどうかという点は、もっと議論されてもいいだろう。組織の偏った性比が男女の処遇格差を生みだしている可能性もあり、より公平なものに変えていく必要がある。また、アマチュアの組織であるNSAでも、支部長70名中女性は1名という状態である。支部長は地域でショップなどを営む人が就いている場合が多いので、女性が務めるということは非常に珍しいが、競技に参加したい女性をエンパワーしていくためには、女性の役職者がひとりでも多く誕生することが必要となるであろう。ボディボードのJPBAの場合は、参加人口は女性が大多数にもかかわらず、理事はほぼ男性が占めているので、やはり参加人口の性比に合わせて理事が決まるというよりも、女性がリーダーシップをとる機会がいかにか少ないかを物語っているのではないだろうか。

意思決定への関与について、大きな変化があったのは、女性だけの大会を女性自身が企画し、運営し始めた点である。1999年以降、全国各地で開催されている女性のための競技会は、メーカーが販売促進のために行なっているものもあったが、ほとんどのものは、後続の女性たちに技術を磨く機会を提供しようとした、プロを含む地元の女性たちの自発的な行為である。競技に参加する人も、運営する人もエンパワーされる、創造的な取り組みである。そういった面ではまぎれもなく、ジェンダー公平の点で大きく前進したと評価されうる。

ただし大会の中では、余興的にミスコンテストなども行われることがあり、競技に参加する女性が、「かわいい女性/美しい女性」や「着こなしの上手なおしゃれな女性」を眺め、投票する光景は、女性の容貌を消費する「男性」のまなざしのありようを踏襲しているような側面があった。どう評価すべきか、意見の分かれるところであろうが、単に女性が意思決定に関与すれば

よいのではなく、ジェンダー公平の視点をともないながら関わる必要があることに気づかされる。

第三に、報酬について。表1で示したように、プロ選手の獲得賞金には男女で大きな差がある。選手個人の戦績に応じた獲得金額なので、それぞれ一試合ごとに男女でどれくらいの格差があるのか、正確な金額は不明だが、男子ですば抜けて秀でている選手は、女性の選手の10倍の報酬を得ているのは確かだ。

日本のプロ資格制度およびプロツアーは、世界で他に類を見ないシステムである。国外の選手たちは、自国内にツアーというものはないので、ワールド・サーフ・リーグ (WSL) のクオリファイイング・シリーズ (QS) という世界戦で戦い、その上位選手だけが参加できるチャンピオンツアー (CT) への参戦をめざす。頂点に立てば女子選手でも1億円を超す年収を稼ぐが (男子はその3倍とも言われる)、非常に熾烈な争いであり、ほとんどの選手が生計を立てることができない。日本人の最高位をもつのは、表1に示したメン1位の大野選手である。しかし、国内では敵なしの選手であっても、世界に出れば74位という成績になる<sup>45)</sup>。つまり、海外では「食べられなく」ても、国内では「食べられる」システムがあるということである。これは選手の生活を保障するという意味で優れた制度であろう。

雑誌編集者で長年取材をしてきたAさんによると、国内では、選手がサーフィンで生計を立てられるようにするためにこの制度は作られたという<sup>46)</sup>。労働者である男性に、家族を養う「生活給」を支給してきた企業の制度とよく似ている。反面、女性にとっては、そこでは家族を養う必要のない労働者として、労働者である男性を支える者として、パート労働者として非正規雇用されるなど、男性ほどの賃金を給与される必要がない者として扱われるということの意味する<sup>47)</sup>。日本のツアーは確かにランキング上位の男子 (とその家族) の生活を保証してきたけれども、女子にも同等の報酬を与える必要があると、果たして考えられてきただろうか。ジェンダー公平が目指すのは、参加の機会の平等だけではなく、結果の平等であり、それはつまり公平な報酬でもある。容易ではないが、国内ツアーの制度をよりジェンダー公平なものにする、あるいは国外ツアーに直接参戦できる選手を育て、より大きな収入を得る機会を増やすなどの方策が求められる。

## V. 結論

本論文では、日本にサーフィンが導入されてからの50年余りの歴史のうち、特に1990年代以降のサーフィン文化に焦点を当て、女性たちとサーフィンの関わりについて分析してきた。分析の視角として、ジェンダー公平 (gender equity) を採用し、女性がサーフィンを行なう際の機会の平等のみならず、結果の平等がどれくらい確保されているのか評価してきた。これまでサーフィンをする女性は、光が当てられることも語られることも少なく、情報は断片的で、特に国内の状況について包括的に把握するのは困難であった。何が達成され、何が達成されていないのか、今

一度振り返り、今後どのようにジェンダー公平が確保されるべきなのか考察することが必要であった。

今回は、1990年代と2000年代という時代に焦点をあてたが、それぞれの時代に特徴的なできごとが浮かび上がってきた。1990年代にはボディボードを「迂回」した若い女性のサーフィン参加があった。これはサーフィン「先進国」であるアメリカやオーストラリアにはない現象で、非常に興味深い結果である。このステップを踏むことで、2000年代以降にはショートボードに乗る女性が増加した。ショートボードは従来、「男性的」にジェンダー化された道具なので、女性にもこれを楽しむ機会が増えてきたということは、サーフィンの世界にいくらかのジェンダー観や規範のゆらぎが訪れていることを感じさせる。

ジェンダー公平ということで改めて考察結果を見てみると、フィニッシュラインの平等には程遠い部分もあるものの、小さいながらも確実な一歩を踏み出した部分もあった。この小さな一歩を積み重ねていけるよう、注視していかなければならない。現在、若い時期から男子選手の海外参戦をサポートする制度が強化されつつある。この波に、女子選手の育成も組み込まなければ、国内外においてさらに格差が拡大してしまうだろう。そのためには意思決定に関与する女性リーダーを育て、参加していけるようにすることが必要である。さらなるジェンダー公平の拡大のため、幅広い層の女性の参加促進、技術・成績の向上も重要であることは言うまでもない。

本論では、さまざまなデータから、サーフィンをする女性の歩みをつなぎあわせ、ひとつの道筋として再構成してきた。参与観察やインタビュー、組織の記録などを補完するために、雑誌や映像等の資料などは非常に役立った。しかし分析を進めていくうちに、それらが表象する女性像には大きな問題点があることに気づいた。非常に差別的で暴力的な表現が日常的にさしはさまれていて、それが女性の参加を阻んでいるのではないかと感じられた。また、そのようなびつで偏った女性観を示し、排除をするということは、特定の男性観を想定し、そうでないものを排除していることになるだろう。女性の歩みだけを取り出して男性と対比させるのでは、「何の接点もない」まま終わってしまうことになる。女性を差異化したうえで成り立っているメディア内の意識やジェンダー観などについて、さらなる分析が必要なことを痛感している。紙面を改めて挑戦していきたい。

## 謝辞

本論文を執筆するに当たっては、久野義正氏と佐藤政機氏に貴重な情報・資料を提供していただきました。心より感謝申し上げます。

## 引用文献、注

- 1) 総務省平成 23 年社会生活基本調査「第 39 表 男女、年齢、スポーツの種類（その他の主な内訳）別行動者数および行動者率」<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001039113>, 2015 年 3 月 14 日取得。この調査によると、サーフィンをするると答えた人は 248,000 人で、男性 201,000 人(81%)、女性 47,000 人(19%)であった。また、『Surfin' Life』誌の記事には、千葉県にある片貝というサーフポイントに来ているビジターサーファー100 人への調査で、男性が 87%、女性が 13%という結果だったことが示されている。「Visitor's Profile 片貝で 100 人に聞きました！」(株式会社マリン企画, 2002) 12 月 308 号 pp.36-37.
- 2) N.Young: *The History of Surfing*, (Palm Beach Press, NSW, 1983). 鈴木正:『サーフィン』(講談社, 1981).
- 3) 財団法人余暇開発センター『レジャー白書』1996 年、2005 年、2007 年、2014 年より抜粋、作成した。参加人口とは、ある余暇活動を 1 年間に 1 回以上おこなった人口(推計値)である。参加率は、ある余暇活動を 1 年間に 1 回以上おこなった人(回答者)の割合である。男女それぞれの割合は、人口における割合ではなく、スポーツ部門における性別余暇活動参加率である。
- 4) D.Booth: "From Bikinis to Boadshorts: wahines and the paradoxes of surfing culture", *Journal of Sport History*28(1)(2001): 3-22; L.Bush: "Creating Our Own Lineup: identities and shared cultural norms of surfing women in a U.S. East coast community", *Journal of Contemporary Ethnography*(2014)1-29; N. Carroll Fearlessness: *The Story of Lisa Anderson*. (Chronicle Books , 2007); M.Henderson: "A Shifting Line Up: men, women, and Tracks surfing magazine", *Journal of Media and Cultural Studies*15(3)(2001): 319-332; L.Heywood: "Third-Wave Feminism, the Global Economy, and Women's Surfing: sports as Stealth feminism in girls' surf culture", Harris, A.(ed.) *Next Wave Cultures: feminism, subcultures, activism*. (Routledge, NY, 2008); R. M. Reed, "Women on Waves: Surfing Toward Gender Equality", (California State University, Long Beach August2010, Dissertation Thesis); L.Stedman: "From Gidget to Gonad man: surfers, feminists and postmodernization", *The Australia and New Zealand Journal of Sociology*33(1)(1997):75-90.
- 5) 鹿野政直:『現代日本女性史—フェミニズムを軸として』(有斐閣, 2004)。比較家族史学会監修、田間泰子・上野千鶴子・服部早苗編:『ジェンダーと女性』(早稲田大学出版部, 2004)。石月静恵・藪田貫編:『女性史を学ぶ人のために』(世界思想社, 1999)。
- 6) 大越愛子の発言「“歴史学・フェミニズム・女性史” 座談会」比較家族史学会監修、前掲書, p.167.
- 7) Brighton Declaration on Women and Sport (Women Sport International)  
[http://www.sportsbiz.bz/womensportinternational/conferences/brighton\\_declaration.htm](http://www.sportsbiz.bz/womensportinternational/conferences/brighton_declaration.htm), 2015 年 3 月 13 日取得。  
筆者の翻訳による。ジョイセフ (JOICEF) の定義によると、ジェンダーの公平 (gender equity) という用語は次のように定義される。「ジェンダーに関するすべての問題に公平性または公正性を適用させること。この原則は権力構造や社会における労働の分担についてもあてはまる。数の上の絶対平等を主張することが公平であるとは限らない。リプロダクティブ・ヘルスの分野では、女性が(身体的、精神的、社会的、経済的側面で)最も大きな犠牲と危険、負担を負うため、意思決定に際しては女性の方が大きな発言力をもつことが公平かつ公正であると通常考えられている。男女の機会の平等を達成するには、双方とも最初から同等の立場で知識や資源を利用できることが必要であり、そうならない場合には、女性のための特別措置がまず必要である」。IPPF「IPPF セクシュアル/リプロダクティブ・ヘルス用語検索サイト」。  
<http://www.joicfp.or.jp/cgi-bin/word/word.cgi?enw=71>, 2015 年 3 月 13 日取得。
- 8) 日本スポーツとジェンダー学会編:『スポーツ・ジェンダー データブック 2010』第 2 版(日本スポーツとジェンダー学会, 2013)。

- 9) 参与観察とインタビュー調査は、愛知県や高知県などの日本国内およびアメリカ(カリフォルニア州)、オーストラリア(ニューサウスウェールズ州)において1995年から2010年までに断続的に行なってきた。その成果は、次に示す文献を参照されたい。水野英莉:「ライフスタイル・スポーツとジェンダー—日本・アメリカ・オーストラリアにおけるサーフィン選手の経験と女性間の差異」『スポーツとジェンダー研究』8(2009)4-17。同:「女性サーファーをめぐる『スポーツ経験とジェンダー』の一考察—『男性占有』の領域における居場所の確保—」、社会学研究会『ソシオロジ』154(2005)121-138。
- 10) ASPは、ロサンゼルスに本社があり、プロサーフィンツアーを組織する。1976年に設立された。現在は、WSL(World Surf League)と改名。WSL「About」<http://www.worldsurfleague.com/pages/about>, 2015年3月18日取得。
- 11) 国内のインターネット普及率は、1997年末では9.2%だったのが、99年末には37.1%、2002年には57.8%と過半を超え、2013年末には82.8%となった。情報通信統計データベース「通信利用動向調査」。<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html>, 2015年3月30日取得。
- 12) ASP Japan Tour「プロサーフィン界を救った男」[http://www.wsljapantour.com/ip/news/obiwans/post\\_46.php](http://www.wsljapantour.com/ip/news/obiwans/post_46.php), 2015年3月22日取得。
- 13) エクストリーム・スポーツ、Xスポーツとも呼ばれる。何らかの「極限」・「危険」性の要素を持ったスポーツの総称。サーフィン、スケートボード、スノーボード、BMXなど、若者文化に影響を与える、比較的新しいスポーツが該当すると考えられている。アメリカのテレビネットワークESPNによって年二回開催されるX Gamesが仕掛け人となり、激しく見ごたえのあるパフォーマンスによって競技するスポーツ番組を作成した。これによってこのカテゴリーが広く知られるようになり、スポーツはファッションや音楽、ライフスタイルなどと深く結び付いて、若者文化(とその市場)に多大な影響を与えている。次の文献も参考になる。R.Reinhart & S. Sydnor, To the Extreme: Alternative Sports, Inside and Out (State University of New York, New York, 2003)。
- 14) Roxy「Corporation Information: About Us」  
<http://www.roxy.com/customer-service-corporate-information-about-us.html>, 2015年4月3日取得。
- 15) R. M. Reed, 前掲書, p.74.
- 16) R. M. Reed, 前掲書, p.74-75.
- 17) JPSA「Grand Champions」<http://www.jpasa.com/champions/>, 2015年3月18日取得。
- 18) Surfin' Life「Front Line」(171号)(株式会社マリン企画, 1994年11月)p.20-21, 35。Surfin' Life「Extra Book: Surfer Girl」(230号)(株式会社マリン企画, 1999年9月)。
- 19) Surfin' Life「Front Line」(171号)(株式会社マリン企画, 1994年11月)p.33.
- 20) Surfin' Life「Front Line」(171号)(株式会社マリン企画, 1994年11月)p.18, 21-25.
- 21) NSA「大会結果・写真」<http://www.nsa-surf.org/result/>, 2015年3月18日取得。
- 22) このうち、支部長、ロングボード、ニーボード、ロイヤルは、男女ミックスのカテゴリーだと思われるが、入賞者は男性のみであって、実質的には男性カテゴリーとして機能している。
- 23) ISA「50 Years of Results Archives」<http://www.isasurf.org/events/isa-world-champions/>, 2015年3月30日取得。
- 24) JPBA「組織概要」<http://www.jpba.org/aboutus/whatsjpba.html>, 2015年3月31日取得。
- 25) Wikinvest「Quiksilver」[http://www.wikinvest.com/stock/Quiksilver\\_\(ZQK\)](http://www.wikinvest.com/stock/Quiksilver_(ZQK)), 2015年3月22日取得。
- 26) The Intertia「Kelly Slater Leaves Quiksilver; Begins New Chapter with Kering Group」by Zach Weisberg, 20140401.

- <http://www.theinertia.com/business-media/kelly-slater-leaves-quiksilver-begins-new-chapter-with-kering-group/>, 2015年3月22日取得。
- 27) D. Booth, Surfing: The Ultimate Guide, (Greenwood, California, 2011) p.14.
- 28) abc News 「Speculation into death of pro surfer Andy Irons Intensifies Aimed Reports of Prescription Drug Found in his Room」 by Andrea Canning, 20101104.  
<http://abcnews.go.com/US/andy-irons-speculation-death-surfer-intensifies-prescriptions-found/story?id=12053334>, 2015年3月22日取得。
- 29) Surf Media 「続・日本のプロサーフィン、その現実。」<http://surfmedia.jp/?p=33514>, 2015年3月22日取得。
- 30) Surfing World 「Introduction of Team House at North Shore」 「楽園ハワイ波乗り小僧奮闘記」2005年5月 vol.32 No.5(322) pp.40-53.
- 31) R. M. Reed, 前掲書, p.53.
- 32) Box Office Mojo 「Blue Crush」 <http://www.boxofficemojo.com/movies/?id=bluecrush.htm>, 2015年3月22日取得。また、国外の興業収入を公開された24カ国を国別に見てみると、オーストラリアが2659995ドル、イギリスが2287163ドル、フランスが1087131ドルと続き、日本では442095ドルとなっている。
- 33) Surfin' Life 「Front Line」(304号)(株式会社マリン企画, 2002年9月) p.19.
- 34) Mermaid Cup 「Staff 紹介」 <http://mermaid2004.com/pg11.html>, 2015年3月22日取得。
- 35) ISO <http://homepage2.nifty.com/isg0159/>, 2015年3月22日取得。
- 36) Hamada Girls Cup 実行委員みんなの日記。 <http://ameblo.jp/daburu-rainbow/>, 2015年3月22日取得。
- 37) BPD Girls Circuit <http://girlscircuit.com/concept.html>, 2015年3月22日取得。
- 38) Surf Media 「続・日本のプロサーフィン、その現実。」 <http://surfmedia.jp/?p=33514>, 2015年3月22日取得。
- 39) NSA 「支部長一覧」 <http://www.nsa-surf.org/about/manager/>, 2015年3月31日取得。
- 40) 厚生労働省「平成23年版 働く女性の実情」  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/dl/11gaiyou.pdf>, 2015年3月30日取得。内閣府男女共同参画局「男女共同参画白書 平成18年版」  
[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/h18/web/index.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h18/web/index.html), 2015年3月30日取得。
- 41) 1990年から2000年にかけて、女25歳から29歳で40.4ポイントから54.0ポイントへ上昇、女30歳から34歳で13.9ポイントから26.6ポイントに上昇している。引用サイトでは1960年代から2010年までの推移がわかる。内閣府「年齢別未婚率の推移」<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/mikonritsu.html>, 2015年4月3日取得。
- 42) 久我尚子「若年層の生活意識と消費実態—厳しい経済状況のなか、生活満足度の高い若者たち、その背景は？」ニッセイ基礎研究所 NLI Research Institute REPORT 2012 September, pp.10-17.  
<http://www.nli-research.co.jp/report/report/2012/09/repo1209-2.pdf>, 2015年3月30日取得。
- 43) 株式会社矢野経済研究所 2013 レジャー産業白書 p.587, pp.592-593.
- 44) Surf Media 「続・日本のプロサーフィン、その現実」, 前掲サイト。
- 45) 朝日新聞 Globe 「Break through 大野修聖プロサーファー」  
[http://globe.asahi.com/breakthrough/120115/01\\_01.html](http://globe.asahi.com/breakthrough/120115/01_01.html), 2015年4月3日取得。
- 46) 水野, 前掲書 2009, p.13.
- 47) 水野, 前掲書 2009, p.10. 日本のトップランクの数人が、サーフィンで生活をまかなうことができると、長年のプロ選手としての経験があるBさんは語っている。